



2025.7.1

園長だより NO114

梅雨空はどこへ行ってしまったのでしょうか、久しぶりの雨も台風の影響で大雨、連日の暑さも夏の酷暑かと思うぐらいであり、この先、いったいどうなるのだろうと？不安の念を抱かずにはられません。そんな中でも子どもたちはわいわいと遊んでいます。室内でも様々な工夫をこらし楽しんでいます。

遊びが広がるとき

こどもの心もちに寄り添う

それぞれが「自分のやりたいこと」をする。どんなことをしようかな 今日こんな遊びをしようかなど、ひとりひとりがめあてをもって遊ぶ。4・5歳児にもなると仲間との関係がよりつながり、遊びも充実している姿がみられる。2カ月前に4歳児が園庭の隅に穴を掘りはじめ、ごろごろと出てくる石を恐竜の化石に見立て発掘作業を来る日も来る日も続けていました。小ささまざまな石が掘り出される。持ち上げられない重さのものもある。子ども達だけではできない（作業）もある。もっと力があればと思いつつもそれぞれの限界を感じる。そんな光景にいつも寄り添い、事の成り行きをにこにこみている先生がいる。クラス担任である。こどもの興味、関心を「みて、聞いて、感じ」こどもたちのしぐさ、行動（動きから）も感じ取ろうとしている。



時にはこどもになり、一緒に穴掘りを楽しみ、こども達からひとりの労働者として仕事を与えられ一緒に遊びを楽しむ、遊びとっていいのか、発掘を楽しむ研究者の営みなのか、こどもたちの心はわいわい、わちゃ、わちゃと弾んでいました。

遊びが継続し発展していくときほど、とことんやる、とことんやれる雰囲気がその空間に蔓延する。

こどもの遊びは毎日、更新する、新しいあそび、創造や工夫も毎日、こんこんと湧き水のようにあふれてくる。

もし、穴掘りはあぶないと否定していたら、穴に落ちたらケガするからという思いで、こども達に接していたら遊びへの気持ちは急降下し、その遊びは消滅していきます。

私たち大人（生活を共にしている人）がこどもの起こすことに、目を向け、しっかり感じなくてはならない、それぞれのこどもの心もちをわかってあげ寄り添わなくてはならない。

時間と空間と仲間 この三つの間がしっかり持てるようにそばにいる大人はかかわっていかねばなりません。もちろん、大人もこども達のあそびの邪魔にならぬようさりげなく同化して一緒に楽しむのです。

そんなことを考えて、生活で実践していくとこどもの興味、関心が広がり新しく視点が生れてきます。発掘してきた大きな石をブラシでゴシゴシしたらどんな形がでてくるのかな？あたま（頭蓋骨）かな？ どの骨かな？恐竜の図鑑をみたり、フィギュアをみて

骨格を調べたり、廃品をつかい大きな恐竜を仲間と作り出したり、こども達の思いは膨らんでいきます。

こども達の「やりたい、やってみたい」の気持は次々と広がる、当然、こども達だけで実現できないこともある。

こども達の姿をみて大人の手を少々入れ実現できることもある。大人が手をかすことも度々ある。ただ、大人よがりではない、こども同士のやり取りを大切にしながら、こども達の要求に応じて、時と場合により手助けする。

時には言葉もかける、つまずき、発想が停滞したらいくつかのヒントも出す。ただこんな対応も大人主導はNG、おとなが、あれも、これもと方向性を示したら、またたく間に大人の考えた活動の中で泳がされていくことになる。あくまでもこどもを中心にかかわることが必須です。

かかわりを考える

生活の大半はあそび、こども達はあそんであそんで、また遊ぶ、自発的に遊びだす、友達に刺激されあそぶ、とことん遊ぶことを常に願い、保育（生活）の中心（柱）としている、「今日はこれ」「明日はあれ」と大人が活動を決め、取り組むような枠のなかでは「とことん」ということは実現されない、没頭するとか、夢中になるということを真剣に私たち大人が考えてあげなくてはなりません。

こども達は片手間についてという心情で遊んではないのです。

いつも真剣、今、この時はもう再来しないことをわかっているように夢中にあそぼうとするのです。

私は物事の良し悪しや優劣をつける教育を受ける時代に育っている 「○か×か」

「できるか、できないか」そんな物差しでみられていた。

「正解」までの道のりをできるだけ短く、手っ取り早く物事の通りを学ばせようとする教育下で育っただけに、こども達の育つ、育ちたいという気持ちに寄り添い、支えていくことがとても大切なことと思っています。

それぞれのこどもの声にきづくことが必要、耳を傾けてあげることが必要、そしてこころも寄せてあげることが必要、当然、声だけでなくこどもの表情、しぐさ、感情にもこころをよせてあげることが必要です。

○か×かではなく △もあっていい。

できる・できないではなく 「いまからやるよ・あとで取り組むよ」もあっていい、こどものあそびには正解がない、正解を求めて遊んではない 今の社会は利便性を求め効率的で合理性を重視する。こどもの世界は真逆であり、大人からみれば無駄は山ほど、利便性、合理性などのかけらもない、時間をかけ、やりたいことをやっている。大人とのズレは山ほどあっていい 叱るどころか、気持ちよく付き合い、にこやかでいることがこども達の育ちにつながるのです

（おおぞら保育園 園長 廣部信隆）